

## 令和3年度 第1回 総合教育会議 議事録（概要）

1 日 時：6月1日（火）13時30分～14時30分

2 場 所：JA三重ビル 5階 大会議室

3 出席者：知事、教育長、教育委員4名

4 議 題：（1）令和3年度における総合教育会議の運営について  
（2）三重県教育施策大綱に基づく取組の振り返りについて  
（3）教育におけるDXについて

5 主な意見（○：教育長、教育委員 ●：知事）

### （1）令和3年度における総合教育会議の運営について

- 新型コロナウイルス感染症に関連する対応については、必要に応じて議論することとしているが、議論するにあたっては、いじめ、不登校、児童虐待など、児童生徒の安全・安心に関わる指標を注視する必要があることから、データも提供していただきたい。

### （2）三重県教育施策大綱に基づく取組の振り返りについて

- 「主な成果」については、端的な記載となっているが、何かを開設したのであれば、その結果どのような効果があったのかというところまで反映してほしい。
- コミュニティ・スクールについての課題として、導入の拡充も大事だが、制度の導入から約20年経過し、学校運営協議会のメンバーの高齢化も進んでいることから、持続性についても考えていかなければならないのではないか。
- コミュニティ・スクールの導入はどのくらい進んでいるのか。小学生や中学生のうちから地元の高校生との体験活動や学習などを通して、集団の一員としての自主性や協調性を育むことが大切であり、学校・家庭・地域に加え、異年齢交流をもっと取り入れてはどうか。  
また、キャリア教育の一環である各地域の産業や自然などを題材にした職業体験や環境調査等は、将来の地元を拓いていく人材を育成でき、若者の県内定着の促進にもつながるのではないか。
- コミュニティ・スクールに取り組んでいる小中学校の割合に係るみえ県民力ビジョンに掲げる令和2年度の目標値は39.8%であるが、平成29年の法改正により、学校運営協議会の設置が努力義務化され、急激に設置数が伸びたことから、実績は52.6%となっている。今後も地域に開かれた学校を実現するために、さらに推進していけるよう取り組んでいきたい。

### (3) 教育におけるDXについて

(この議題については、デジタル社会推進局の田中局長も同席)

<田中局長> 教育におけるDXを検討するにあたっては、現在の教育環境をどのようにデジタル化していくのかということに加え、全世界のネットワーク化・超長寿化・人口爆発といった未来に起きうる大きな変化を踏まえ、圧倒的なスピードで変化しているデジタル社会に適応した教育のあり方についても議論していく必要がある。

- パソコンやタブレットでは学べないこともたくさんある中で、DXによって子どもたちをどこへ導くのかという目的をしっかりと見定め、子どもたちの学びや教職員の働き方、働く環境の改革を進めていくことが大切である。
- 自治体によって学校のICT活用状況に差が出ないように、活用が進んでいる学校の取組も共有しながら進めていけるとよい。奈良県では、デジタル教材の使い方などについて、教員だけでなく、教育委員会の指導主事や保護者、地域で子どもたちや学校教育に関わる方を対象とした研修会をオンライン開催するとともに、企業と連携したソフト開発も検討しており、三重県が取組を進めていく上での参考になるのではないかと。
- 教育におけるDXを検討する上で、教職員の業務負担軽減と子どもたちの学びは分けて考えるべきである。教職員の業務負担軽減については、便利なツールの導入によって逆に仕事が増えることのないよう、仕事の範囲を明確にするとともに、コロナ収束後を見据えて、教員向け研修における対面とオンラインのベストミックスを考えていくことが必要である。  
子どもたちの学びについては、五感を使った教育など、デジタル化できない部分の教育的意義も含めて議論し、子どもの成長段階や教育目標に応じて、ICTの使い方を丁寧に検討することが必要である。
- 教育は教えるだけでなく育むものでもあるため、成長段階に応じたDXを考える必要がある。デジタル化によって、今まで教員から聞かされるだけだったことを自分の目で見て刺激を受けることが可能になるとともに、どこからでも世界中の大学の英知を享受できるようになることは有益であるが、そうした物事を読み解くための読解力は成長段階に応じた教育で補う必要がある。

また、教育のDXを進めることで、子どもたちが三重県の地域をより魅力的に感じられるようにしていくことも必要である。

- 県立高校では、端末等の活用について試行錯誤しているところであり、2学期が始まる前に成果や課題を一度整理する予定である。小中学校については、市町のICT活用状況を共有できる場を令和2年度に設けたため、令和3年度もそうした場でしっかりと情報共有し、取組を広げている。

きたい。

教職員研修については、コロナ収束後に全て対面に戻すのではなく、オンラインを活用した効果的な研修体系を整理する。

デジタル技術をうまく使えば、時間や場所を超えて今まで出来なかった出会いや学びが可能となり、子ども一人ひとりに応じたレベルの学びができると思うので、そういった点にも着目し検討していきたい。

<田中局長> 現在の教職員の働き方や働く環境、子どもたちの学びをデジタル化していくという話がある一方で、デジタル時代をどう生き抜いていくのかという議論も必要である。今のデジタル時代を既に生きているという前提では、デジタルを取り入れるか否かという話ではなく、PCやタブレット、デジタルに関連したものを活用することが人間的ではないといった、ある種の偏見は取り下げていかないといけない。インターネットはもはや空気であるという前提で、どのようにデジタル時代に適応した教育を新しく作っていくのかといった議論が必要となる。

● 三重県は「あったかいDX」を掲げており、教育においても「あったかいDX」を進めていくにあたって、三つのことを大切にしていきたい。

一つ目は、何のためにするのかということのを皆で共有した上で進めていくこと。二つ目は、メリットを享受しつつ、デメリットをカバーする手法を皆でよく議論すること。三つ目は、大人が子どもたちの壁になってはいけないということ。

一つ目の、何のためにするのかについては、「可能性を広げる」「格差をなくす」「子どもたちの安全・命を守る」「楽になる」といったことが考えられる。可能性を広げるというのは、例えば、重度の脳性麻痺で自宅から出られない子どもがデジタルを使って一緒に授業に参加できるようになるといったことがある。格差をなくすというのは、全国知事会「これからの高等学校教育のあり方研究会」によるAIドリルの検証で、介入群と非介入群を比べると介入群の方が学力が高くなっており、その中でも低所得者層で学習環境が整っていない子どもたちの方が学力向上に効果が見られており、格差をなくすための環境を整えるということがある。子どもたちの安全・命を守るというのは、例えば菰野町では、小学生が通学するバスで顔認証を活用し、子どもが自宅近くのバス停で降りると保護者にメールが届くようにすることで、子どもの安全を守るというような仕組みがある。楽になるためというのは、もちろん煩雑な事務などを簡単に出来るようにすることなどがある。

いずれにしても、何のためにDXを進めるのかを皆でよく共有しながらやるべきであり、デメリットをカバーする方法を考え、良いものを取り入れていくということが大切である。